

21世紀ひょうご市民学会 会報

9号

2009年2月26日

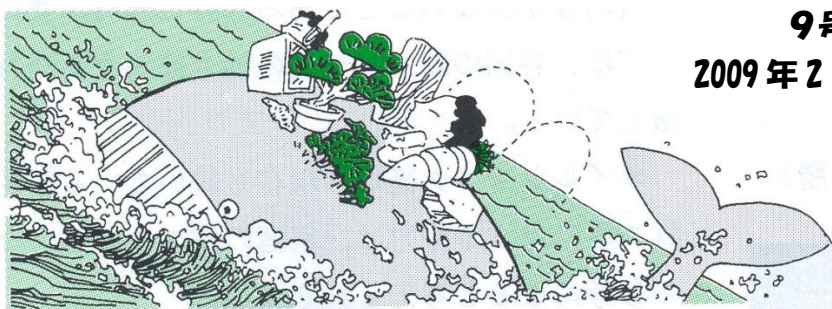
—編集・発行—

21世紀ひょうご市民学会

「神戸生活創造センター」登録番号 630

代表世話人 澤木昌典

http://www.geocities.jp/hyogo21_citizen/index.htm



日脚が伸び陽が和らいできたように感じられます。3月！巣立ちの時です。

昨年秋の金融危機を機に、「津波」とも呼ばれるような大量解雇が日本でも起きています。1年前とは様変わりの雇用環境の中で、仕事を得、出ていく若者にエールを届けたい気分です。皆さまも、きっと、テレビや新聞で報じられるニュースに「一言物申したい」と腹ふくれる思いをされている方が多いのではないのでしょうか？以前、「物申す」のテーマで発表者を募ったところ、大盛り上がりだったのを覚えています。らくらくクッキングでもしながら、ざっくばらんに語る会をもつのも面白いかもしれませんね。希望を聞きながらいっしょに中身を作っていきたいと思います。

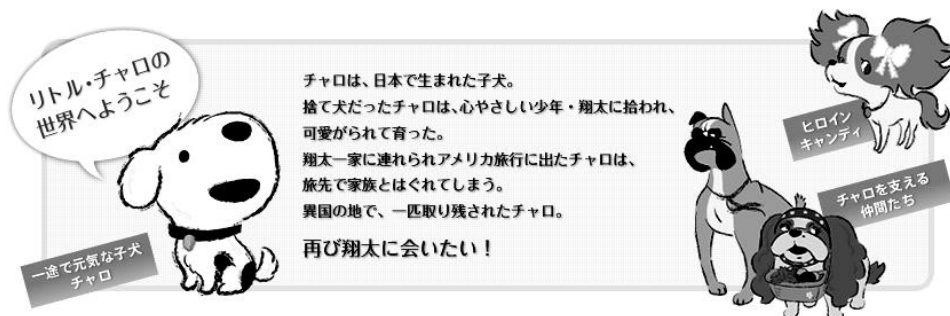
第9回「知的サロン」へのご案内

私たちはテレビ、ラジオ、インターネット、新聞、雑誌など様々な形で伝えられる情報の渦の中で生活しています。生活スタイルや特性にあわせて活用しています。ラジオは脳で聴くともいわれています。

今回は、長く情報の創り手、送り手として関わってこられた前ラジオ関西社長の古川さまから、NHKの人気英会話番組「リトルチャロ」を通して、「メディア融合のあり方」についてお話しいただきます。なぜこの番組がヒットしたのか、というところから、受け手の私たちが知らなかった話が伺えそうです。どんな話が飛び出すのか楽しみにご参加ください。

ちなみに、この番組は、テレビ、ラジオ、インターネットの三位一体学習（＝クロスメディア）で、ストーリーにわくわく感があります。

- ◆日時：平成21年3月14日（土曜日） 15:00～17:00
- ◆場所：県民会館 12階 1203号室（21名可能）
- ◆講師：前ラジオ関西社長 古川 潤 氏
- ◆テーマ：「リトルチャロにみるメディア融合のあり方」



◆ご出席の有無を同封の返信はがきに記入し3月5日（木）までに投函してください。

➤ お知らせとお願い

平成21年度総会を7月11日（土曜日）14:00から行います。

会場は追ってご連絡いたします。皆さまのご予定に組み入れておいてください。

総務担当 塩野 勝・田中有司

絵を楽しむ

田中有司

昨年1月から自宅近くの公民館で行われている水彩画同好会に参加することにしました。田舎で過ごした子供のころは他に楽しみがなく、高校時代までは油絵等も画いていましたが、その後定年を過ぎるまで書くことからすっかり離れていました。残る人生、絵を楽しみながら過ごしたいとの気持ちが次第に強くなり、同好会に入会してみたのです。この会はずでに35年以上継続している会で、会員数約60名、毎週1回室内教室、または屋外写生会があり、年2回展覧会を行います。講師はこの会の先輩ですが、会には高齢者も多く、講師そこのけの技量を持つ人も多くおられます。2時間余りの間に、絵筆と同時に口も結構動いていてなかなか賑やかな中に、6~10号程度の大きさの水彩画をすばやく仕上げている、この会の活気が気に入っています。

室内教室の静物の場合は毎週4人のモチーフ係が選出されていて自由なモチーフを持ち寄り、気に入ったモチーフのそばに輪を描いて開始します。花、人形、果物、野菜、花瓶、グラス、ボトルなど種々雑多で、それぞれの特徴を表してはいるが必ずしも美しいとは限らないし、そこに飾られているモチーフをすべて画こうとしても、まとまらないし時間も足りなくなってきました。すなわち「何を」「どう描くか」が大切で、2時間後にはいかにも美しく、新鮮で、輝きをもった絵に仕立て挙げられていきます。しかし根本はいかに正確に描写するかで、モチーフの持つ形、色彩、光、陰影を正確に表すことができれば、それは美しい絵になり得ると思います。レオナルド・ダ・ヴィンチは肉体を解剖し克明に筋肉や骨格の様子を画き写し制作に備えたと言われます。大きな抽象画美術展に行くと絵に取り囲まれると頭がおかしくなるような気がすることもあります。どのような抽象画家でも基は正確に描写するということから始まっているのだらうと想像します。平山郁夫の本に芸大に入ってから摸写ばかりを何年も続け、自分の不足を補うことができたと言っています。「何を」「どう描くか」はこのような基礎技量が身につくにつれて、熟してゆくものかと想像しています。

東京、六本木にある新美術館や上野の美術館でよくおこなわれる展覧会を見に行くと、そこに展示されて



ある日の絵画同好会

いる絵の規模に圧倒され、出展数の多さにくたびれてしまいます。少し規模は小さいが大阪でも神戸でも展覧会は良く行われていますし、さらに規模の小さいギャラリーや画廊の展示数や出展数を考えると、いかに絵画人口が多いか想像を絶するものがあります。それでは、なぜ人はこのように絵を描くことを好むのでしょうか。「人はなぜ絵を描くのか？」この疑問をさかのぼると、約2万年から1万5千年前のアルタミラや、ラスコーの洞窟壁画にぶつかるそうです。1879年スペイン北海岸のアルタミラの洞窟壁に書かれた先史時代の野牛等の絵が発見され、1940年フランスのラスコーでも動物たちの大群の絵が発見されて以来、この疑問は今も美術史家の間で沸騰しているそうです。人類の祖先ともいべきクロマニヨン人たちが入口から100m近い洞窟の真っ暗な壁に、あたかも今も息をしているかのような動物たちの絵をなぜ画き残したのでしょうか。諸般の研究者たちのある説を要約すれば、「その時のヒトたちにも恐ろしい“死”が存在し、その死は未知の世界“聖なる場所”へ移り変わる形であり、そこへ通じ合う方法を儀式・儀礼のなかで探した。“聖なる場所”は偉大なる大自然で、それを描くことによって、死者の行く“聖なる場所”へ通じ合うことができると、祈禱師が思考した」とも言われています。

私はまだ、同好会でも絵をすばやく仕上げることができず、未完成作品の山積みとなっています。それでも絵を描いている約2時間程度は、夢中です。モチーフに向かって、どのような絵にしようか（絵の中心になるものは何か。光と影は。支配する色は何色か。）と数分考え、あとは一気に画面に向かっていきます。モチーフを正しく写し、しかし自分のイメージに仕立てていく面白さは、言葉では表現しにくいものです。クロマニヨン人のように崇高な哲学者にはなれませんが、このような経験が冥途への土産になればと思っています。

今、私が面白がっていること

平成21年1月9日 足立隆子

3度目の二十歳を迎え、これまでの自分を棚卸しし、自分自身がやりたいこと、やっていて面白いことを優先したいとリセットしました。今、面白がっていることが2つあります。1つは、「人一人おるはよからず」という教えに従い、特に、若い世代や子どもたち(中・高生)との関わりをもった活動をしていること、もう1つは、土の力に魅せられ畑で野菜作りをしていることです。土にはひとを育てる力、つなげる力、それに心をやすす力があると実感しています。この2つは、私の原点だと気付きました。田舎育ちの私は、街のくらしになじんだつもりでいましたが、土をさわる気持よさに目覚めたこと、そして、学生時代にめざした教職の道をどこかで活かしたいという思いがあったことにつながっているからです。

YMCAのホストファミリープログラム(留学生が日本の生活に慣れるサポートをすること。家庭に招き食事や買い物をする等)がスタートした25年前から、アジアやアフリカからの留学生のお母さん役を続けています。交流した学生は10人以上になります。彼らを招く時は、家族だけではなく近隣や友だちにも声をかけ交流の輪が広がるようにしました。

最初の留学生は中国から。19歳の彼の礼儀正しさや謙虚さがとても新鮮であったのを今でもしっかり覚えています。日本に滞在し事業をやっている彼らとは親戚づきあいの間柄で、お子さんがもう19歳に成長し北京の大学生になっています。まさに、多文化共生社会を先取りしている生き方。今では、彼らの生き方から教えられることばかりです。

また、最近帰国したアフリカのマラウイからの女性(2人の男の子をもつ母で大学の研究職として働く主婦)も印象深いひとりです。「マラウイ」という国を知っておられますか?彼女は日本への留学生第1号。イギリスの植民地から独立してまだ40数年の国で、最貧国ということです。私に関わっているフリースクール(何らかの理由で学校に行けなくなった子どもたちの居場所)に招き、マラウイの暮らしや学校の話をしてもらいました。マラウイには「貧しくてお金がないため、学校に行きたくても行けない子がたくさんいる。その子たちは畑仕事や家事を手伝っている。」という話は、子どもたちにとってカルチャーショックだったようでした。テレビではなく直に聞く話に現実味



をおぼえたからでしょうか。一方、彼女にしてみれば「この元気な子どもたちが「どうして学校に行くことができないのかが理解できない。学校は無料なのに、お金を払ってここにきている理由がわからない。」と、いろいろ質問してきました。お互いにカルチャーショックを受けた一日でした。また、彼女は主食のとうもろこしの粉を使ったマラウイ料理を作ってくれました。粉に熱湯を加えながら長い棒で団子状に練り上げるには大変な労力が必要でした。今、マラウイの食を代表するこの棒を台所に置き、買い過ぎ、食べ過ぎ、持ち過ぎの生活を戒めています。

留学生たちとの交流から、与えているようで、実はたくさんものを私たち家族は与えられてきたのだ、と思わされています。自分の家族以外にもう一人気になる存在があることは心を豊かにしてくれます。

フリースクールの子どもたちには「生活することが教育」ということで、まず「食べる力」をつけたいと、野菜作りに取り組んでいます。とれたての野菜はまず生で味わい、調理し、皆で食べ、ゴミは土にもどすという食の循環を実践しています。一度に収穫できるものは、乾燥させてふりかけにしたり、漬物にしたりと丸ごと全部使い切るようにしています。もったいなくて捨てることができないのです。皮も葉っぱも。今までのヒット商品は、モロヘイヤ(アフリカ産の葉っぱでねばねばで栄養価が高い)のふりかけ、はやとうり(1本のツルからたくさんの実がなる)の奈良漬。子どもたちは、虫に興味があったり、写真を撮ることに夢中だったり、行動は即作業態勢というわけではないですが、「育てたものは違う」とおいしく食べています。

苦労もありました。3年目にガタンと収穫量が落ち、改めて土づくりの大切さを教えられました。ミミズも住み着き働いてくれています。教育も同じと肝に銘じています。

十五歳の夏休み 一冊の植物図鑑

上田寿榮

昭和24年、高校1年の夏休み、生物の宿題は野生植物採集とその標本製作だった。図書室で牧野富太郎著「植物図鑑」を借りた。

今思い起こすと戦後まもなく出版されたその図鑑は製本も印刷装丁もお粗末で、内容も学生向けに編集されたハンディな一冊であったように記憶している。しかし、植物図は実物そのままに写實的に正確に、克明に描いてあるのに煩雑な感じが無く、白黒だけの図鑑から何故か葉や花や実の色も、細かい毛の生えた葉の触感まで伝わってくる感動を覚えて、時が経つのも忘れて読みふけた。はるか60年前のことである。

日本は豊かな自然と豊富な植物に恵まれて、植物は人間の暮らしのあらゆる場面に関わってきた。衣食住はいうまでもなく宗教・医療・芸術などの精神文化においても重要な役割を担っている。

平成12年3月に第1回「緑・花文化の認定試験」が全国で行われることを知って申し込んだところ、

- ①科学と植物
- ②環境と植物
- ③生活文化と植物
- ④芸術文化と植物

の分野にまたがった複合的な問題が出されるという。

結果は、全国で受験者1万5千人余。1級の認定をもらった。

思えば15歳の夏の日の感動がそうとは意識せずに日常の暮らしの中から植物に関するさまざまな知識と興味を蓄えていたのかもしれない。

趣味はと聞かれると、文字通りの「下手の横好き」ながらボタニカル・アートである。

蛇足ながらボタニカル・アート (Botanical Art) は文字通り植物画であるが、植物を描いたもの全てが植物画ではない。ゴッホのひまわりも、モネの睡蓮も日本の伝統的花鳥画も植物を描いているが、ボタニカル・アートとは言わない。

植物のありのままの姿を植物学的見地から正確かつ精密に描きしかも観賞に堪える芸術性も備えて、見る人のところをなごませるものと定義されている。

さて私のは芸術性を備えているとはお世辞にも言えないが、芸術性が備わるように、そして見る人の心を和ませるような作品をという永遠の目標がある。

この秋、アルバイト先の校庭のザクロが鈴なりの豊作で一枝手に入れたものの、水揚げが下手だったのか見る見る葉っぱが萎びて縮れてしまった。紅い実と灰色の枝は、冷蔵して色を保ちなんとか彩色できたが葉っぱのスケッチと彩色は夏が来るまで待たねばならない。



■ 21世紀ひょうご市民学会 「会報 第9号」 発行担当および連絡先

担当	氏名	電話番号	FAX 番号	メールアドレス
広報	足立隆子	078-792-6243	同左	ma-chin@muf.biglobe.ne.jp
	田中智子	078-241-0320	同左	s-tanaka610@beach.ocn.ne.jp
会計	松原宏治	0797-23-6498	同左	kouji-ma@fa2.so-net.ne.jp
総務	田中有司	0797-74-3327	同左	ymtanaka895@yahoo.co.jp

<あとがき>

今号から、「とも・とも(いいとも・やるとも・パソコンワークネット)」の協力を得て発行することになりました。原稿入力、割り付け、などを依頼しましたが、いずれ発送までの一括外注をお願いしようと考えています。皆様に投稿のご協力をお願いし、編集を工夫し、楽しい会報に育てていきたいと思ひます。皆様のご協力をお願いしします。